

番組組

仕舞 碇いかり 潜かずき (シテ) 今井 克紀

(2:00)

狂言 二九十八にくじゅうはち (男) 茂山七五三

(女) 茂山 宗彦
井口 竜也

(後見)

休憩

能 妻戸つまど (シテ) 今井 清隆

(ワキ) 有松 遼一
(ワキツレ) 原 陸
(アイ狂言) 島田 洋海

(3:00前)

(後見) 豊嶋 幸洋
金剛 永謹

重本 昌也
山田 伊純

(地謡)

豊田 正勝 今井 克紀
芦田 一彦 種田 道一
宇高 徳成 松野 恭憲
徳田 宣幸 金剛 龍謹

(4:00)

主催 今井後援会 後援 京都新聞社

仕舞 碇潜(いかりかずき)

仕舞とは、能一曲の一部分を地謡のみをバックに紋付ハカマ姿にて舞うものです。あの壇ノ浦の戦いの場面、平ノ知盛はついに碇を担いで海中に沈み行くという能「碇潜」の最後の部分を舞うもので、所要四分位です。

能 妻戸(つまど)

平安初期、目覚ましい出世の菅原道真は藤原時平の陰謀により大宰府に左遷され、失意のうちに没しました。彼の死後、京都では相次ぐ災難が起り、ついには清涼殿が落雷を受け多くの死傷者が出たため、これらが道真の祟りだと恐れた朝廷は道真の罪を赦すと共に贈位を行つた。この落雷事件から道真の怨霊が雷神と結びつけられ今日の天神信仰に繋がって行きますが、能にも「雷電」という曲があります。前シテ道真の霊、後シテが「雷」で、以前清隆師は国立能楽堂主催公演でこれを務められました。今回はこの「雷電」を作り替えたといわれる稀曲「妻戸」を取り上げました。

宝生流では御鬘貞の加賀前田家の祖が菅原氏であることへの遠慮から「雷電」を「来殿」と改め、後シテを暴雷ではなく天神の位の貴人として登場させてこれに優美な舞を舞わせる能に作り替えましたが、今度は昭和に入つて坂戸金剛最後の家元、金剛右京師がこれを更に「妻戸」と改名して新たに金剛流の能と致しました。

最初、比叡山延暦寺の高僧(ワキ)法性坊の登場、護国の法会を執り行い本日が最終である旨を謡いつ脇座に腰掛けると、何処ともなく菅丞相(かんしょうじょう)、即ち道真(前シテ)の霊が現れ生前の師恩に感謝するうちに、俄かに時平に対する怒りから、仏壇のザクロを噛み砕き妻戸に吐きかけるとこれが火焰となって燃え上がります。そしてその煙のうちに菅丞相は姿を消し中入り。例によってアイ狂言の語りがあります。

後半、通夜をして待つ僧正の前に天満天神となつた菅公の神霊(後シテ)が現れ神号を与えられた事を喜ぶ早舞(はやまい)を舞い、北野に降臨して天長地久の世を守る事を誓うのです。

使用面 前シテ 怪士(あやかし)

後シテ 中将(ちゅうじょう)